



【2017/11/15 Release】

- |                   |                          |
|-------------------|--------------------------|
| 01. おんなになあれ       | 作詞・作曲：飛鳥涼 編曲：押尾コータロー     |
| 02. Be Free       | 作詞：麻生圭子 作曲：羽場仁志 編曲：河野充生  |
| 03. POSITIVE      | 作詞：佐藤純子 作曲：西司 編曲：河野充生    |
| 04. わかりあいたい       | 作詞：佐藤純子 作曲：和泉常寛 編曲：河野充生  |
| 05. 目覚めたヴィーナス     | 作詞：有森聡美 作曲：大田黒祐司 編曲：河野充生 |
| 06. チャンス          | 作詞：森川美穂 作曲：小森田実 編曲：河野充生  |
| 07. 99 Generation | 作詞：山田ひろし 作曲：内藤慎也 編曲：河野充生 |
| 08. PRIDE         | 作詞：佐藤純子 作曲：大内義昭 編曲：河野充生  |
| 09. 恋していれば大丈夫     | 作詞：高橋研 作曲：広瀬香美 編曲：河野充生   |
| 10. 翼にかえて         | 作詞：山田ひろし 作曲：小路隆 編曲：河野充生  |
| 11. ブルーウォーター      | 作詞：来生えつこ 作曲： 編曲：河野充生     |
| 12. 教室            | 作詞：千家和也 作曲：小森田実 編曲：河野充生  |
| 13. ビニールの傘        | 作詞：松井五郎 作曲・編曲：山川恵津子      |

※「ビニールの傘」(新曲)、他全てセルフカバー(新録音)

森川美穂アルバム近代史を書き始めて思うのは、当たり前ですが、人生は続きものであるということです。新聞や毎日のニュースには単発の出来事もありますが、多くの事象は、続きものです。

政治、経済、コロナ、自粛、全て、ある出来事に対して、誰かがどこかで何かを判断し決定します。その決定に基づいた次の現象が起こり、また、それについて検討し次の決定が行われていき、to be continued ということになります。

「BEST COLLECTION Be Free」というセルフカバーアルバムを2017年11月にリリースしましたが、このアルバムが生まれる背景には、何があったのか?から、今回も始まります。

2016年の11月、作曲家 山川恵津子さんのセッティングで、作詞家 松井五郎さんと森川美穂は始めて対面しました。松井五郎さんといえば、80年代～90年代、女性歌手の歌詞も多く手掛けております。松井五郎作詞作品は、すでに3000曲超えた作品がCD化されています。

コロナ以前に打ち合わせをしていた時に、3300曲くらいと言っていたように記憶しています。若い頃に一番忙しい時には、年間200曲以上作詞しCD化されたそうです。80～90年代の森川美穂作品に、松井五郎作詞作品がないことが不思議なくらいです。

松井五郎さんは、チャゲ&飛鳥「熱風」で作詞デビューです。ヤマハとのつながりの中で、とても近いところにいた存在です。ところが森川美穂と松井五郎は、長年、会うことがありませんでした。

前述していますが、森川さんは、アルバム「Life is Beautiful」をレコーディング中も、その後も、「歌謡曲が歌いたい、、歌謡曲が・・・」と呪文を唱えるように言い続けていました。

「My Dear」のコーラスを山川恵津子さんをお願いしたスタジオで、山川さんと再会を果たし、山川さんから「美穂ちゃんは、どんな歌を歌っていききたいの?」と質問され、、「歌謡曲が歌いたい、、歌謡曲が・・・」と、いつもの呪文を繰り返していました。

その時、山川さんが「美穂ちゃん、松井五郎と会って見たら?彼と会ってみるといいよ。」という流れがあり、2016年11月、渋谷のホテルのラウンジで会うことになりました。振り返ってみれば、このように運命は導かれ to be continued と連続していくのです。

五郎さんとの始めてあった日の森川美穂は、まるで普通の女の子が、初めてのお見合いをする時のように緊張していました。顔の表情筋を強張らせ、丁寧だけどぎこちのない挨拶、、後にも先にも、あんな森川美穂を見るのは初めてでした。

特別なテーマがあるわけではなかったのですが、森川美穂が歌いたい「歌謡曲」とは何ぞや? みたいなことを話し合いながら、作って見ないとわからないから、作ってみよう、という流れになっていきました。

私は、歌手に対して、常々、感じることがあります。以下のような話をしました。私が制作担当してきた、全ての歌手に漏れなく当てはまるのですが、新曲のレコーディングのあと、CDリリース後にライブで歌い続けていって、歌い方が変化していくのです。新曲は出来てからすぐレコーディングを行うケースが多いため、ある一つのアプローチを決定し、歌入れをします。しかし、ライブで歌う回数を重ねることで、レコーディング時とは違うアプローチを見つけ、自然と歌が変化していくのです。そういう意味では、レコーディング時では、まだ歌が完成していないと言えます。歌はライブと共に成長を続けるのです。

そこで、レコーディング時期は決めず、将来CD化することを前提に、森川美穂の歌謡曲探しチームを、作詞:松井五郎 作曲:山川恵津子 で進めてもらえないかという願いをしました。

2016年の久しぶりのNew Album「Life is Beautiful」がリリースされる直前、松井五郎さん、山川恵津子さんとの打ち合わせで、すでに2017年以降にリリースするアルバムの話を進めて行きました。

森川美穂の歌謡曲を作り上げる旅がここから始まりました。

言葉というのは、便利のようで、うまく伝わらないことが多く起こります。生きてきた背景、文化、により、10歳も違えば「歌謡曲」の概念が大きく異なるのです。人間は、つい自分の常識を、その言葉に重ねます。「単語」が同じだから、会話上では「そーです、そうなんです!」などと、うまく、互いに意味が通じたと思い込みます。それで、楽曲を作ってみると……「うーん、こういう事じゃないんです。」……みたいなことが起こったりします。

そこで、共通言語と思えるイメージを探していきます。それは、海外の歌手の“ある作品”でもいいし、その人のビジュアルでもいい。言葉だけでは届かないムードみたいなものを、互いに共有する努力をします。

数日後、松井五郎さんからメールをいただきました。

「パトリシア・カースってご存知ですか？あのイメージはどうですか？」  
というメッセージでした。

私はびっくりしました。仕上がりは違うのですが「Life is Beautiful」を作るときに、私が最初にイメージしていた世界が、パトリシア・カースだったのです。ジャケットのイメージも、実はパトリシア・カースのような、大人の女、そしてモノトーンというイメージオーダーを、デザイナーの遠藤さんをお願いして「Life is Beautiful」のジャケットの写真は撮影され、デザインされました。

こうして言葉だけでは埋められない、互いのイメージの世界を、これまたやっぱり言葉で伝え合いながら、2つの円の重なりを少しずつ増やしていきました。こうして、まずは「ユメサライ」そしてその次に「ビニールの傘」という作品が生まれました。

「ユメサライ」は、中々、癖のある作品です。私は大好きですが、もしも、今後の森川美穂の進む世界を提示する楽曲として、この1曲を代表曲として紹介したら、今までのファンは「え？マジか？」となる可能性があると思ひまして、アルバム「BEST COLLECTION Be Free」のラストには「ビニールの傘」を収録することにしました。

私自身は刺激的なアプローチは大好きです。なので、こういうショッキングなアプローチは個人的には試してみたいタイプなのですが、森川さんのライブを見ていると、私のようなひねくれた性格の人を見かけることがありません。

いつも、まっすぐ森川美穂を応援してくださるファンに対して、急激な変化、落差のインパクトを出会い頭でぶつけるような、「ノリ」でアプローチすることは「罪」になると考えました。

とはいえ「ビニールの傘」も、随分と酷い歌ではあります。メロディーはドラマティックですが、このドラマティック・アンブレラは、かなりキツイ。全曲「ビニールの傘」方向へシフトするのは、あまりに展開が速すぎます。

そこで30年以上、森川美穂という歌手を応援してくださっているファンの皆様へ感謝と共に「今」の森川美穂の歌声で、セルフカバーを歌うアルバムを制作しようと森川さんへ提案しました。そしてこのアルバムのラストに、今後の森川美穂の方向性を示す作品として「ビニールの傘」を収録するというのを、森川美穂の歌謡曲への第一歩としたいと考えました。

セルフカバー作品については、ファンの皆様へのアンケート調査を行い、人気曲を中心に12曲を選曲し、13曲目に新曲「ビニールの傘」を収録しました。

1曲目に収録した「おんなになあれ」は、アコースティックギターの名手、押尾コータローさんに依頼し、押尾コータローひとりオーケストラのようなサウンドで、ギターと歌を同時に録音しました。

そのほかの楽曲のレコーディングは、2016年の11月からライブに参加してもらったミュージシャンに演奏してもらいました。時間軸としての順番から言うと、このような表現になるのですが、実は、レコーディングで器用したいミュージシャンを集めて、ライブを行なったというのが正確な表現です。

森川美穂のマネジメントを引き受けたときに、ライブ制作も私に関わることになったため、レコーディングとライブを通して、森川美穂の歌の魅力を最大限に引き出すためのチーム作りとして、レコーディングを視野に入れてミュージシャンをライブに誘っていきました。

2016年の11月のライブで、バンドメンバーと森川さんとの信頼関係は築かれ、2017年夏のレコーディングはとてもスムーズに進行しました。

ベーシックの4リズム(Drums, Bass, Piano, Guitar)のレコーディングは、大体、2曲で5時間というのが、昔から常識的に使われているスタジオ時間です。このアルバムのベーシックはPercussionまでを含み、5リズムとなりますので、それだけマイクのセッティング時間や音の調整に時間がかかります。

セッティングや休憩も含めて、1日平均10時間×3Daysで12曲のベーシック。その上ギターソロやオルガンなどのダビング作業までを行いました。私が計画したレコーディングスケジュールではありますが、正直に言えば、こんなハードなレコーディングは、私自身、初めてのことでした。

この厳しい条件を積極的に楽しめる精神を持つミュージシャンばかりだったので、スタジオの空気はとても和やかでした。そんな熱き心と腕前を持ち合わせたミュージシャンに参加してもらえたことは、森川美穂の大切な財産となっていきました。

森川美穂の歌について言えば、この年のレコーディングでは珍しく喉の調子が悪かった。リズム録音の時に歌と一緒に歌うのですが、何か喉に引っ掛かるといった現象がありました。本人もスタジオ入りしてマイクの前に立って歌ってみて、、、「あれ？ なんだろ、これ。おかしいなあ。」・・・と、言った感じでした。

私の目論見としては、セルフカバーものの半分、少なくとも6曲はリズム録音と同時に歌う時に、歌の録音も完成させてしまうつもりでした。ところが、どうも調子が悪い。

スタジオではまずはベーシクトラックのリズム録音を進めないとも時間は無くなっていきます。なんせ、毎日、4曲レコーディングしないといけないのです。そこで、あまり喉を酷使しないように、仮歌として1~2回程度の歌うだけに留めながら、レコーディングを進めていきました。

歌以外は無事に3日間で12曲、ベーシック+αダビングまでクリアすることが出来ました。シンセサイザーなどのダビングは、キーボードの野崎洋一さんにお持ち帰りをしてもらい、自宅スタジオでの作業をお願いすることにしました。

問題は、歌入れのスケジュールです。なんせ、森川さん自身のスケジュールが、後日に調整できている日程は2日間しかありません。要するに、2日間で12曲を歌うということになります。常識的には難しい話です。大体、歌入れは1日に1~2曲というのが普通の考えです。1時間に1曲のペースで歌を入れても12時間です。喉を休める時間も考えると1日7~8時間、声帯が悲鳴をあげてしまいます。しかし楽曲は平均4分です。1~2回で満足できる歌が録音できれば1曲10分で録音できます。

歌の完成度という意味では、今日と明日が大きく違うことはありません。今日まで努力してきた実力が、今日と明日では大きな違いがあるはずがないのです。ましてや、セルフカバー作品です。今までに30年歌い続けてきた曲は、歌のアプローチがすでに完成されています。1回目と2回目の歌が、大きく違うこともありません。これは、5回歌っても同じです。本人の満足度は、本人にしかわかりませんが、喉の調子さえクリア出来ていれば、いつ歌おうが、その時に歌った歌が、2017年現在の森川美穂の歌であります。



とにかく、問題は、喉の調子です。歌入れの日までには、体調を整えてきてくれるでしょう。森川さんは、気合いで体調を整えるところがあります。誰から聞いたか忘れましたが「楽天的は意思、悲観的は気分である」ということを聞いたことがあります。私は、歌入れの日を、楽天的に構えて迎えることにしました。

歌入れの日、東京タワーのそばのスタジオで待ち合わせをしました。いつものように、迷子になりながら到着しました。赤羽橋の駅の改札は一つだからね。改札を出たら右に行く。そうすると、エレベーターがあるから、エレベーターで地上に出る。地上に出たら右方向、麻布十番方面へ歩き……と、かなり細かくメールをしています。もちろん地図もメールしています。「ありがとうございます。わかりました。」……と返信をくれます。それでも改札を出るまで左に行き、地上に上がり迷子になるのが森川美穂という人です。遠回りしても、到着するので、それはそれで良いと考えることにしました。楽天的な意思を持ち、悲観的な気分を遠ざけ生きるための、いい訓練です。

「何から歌う？」

「ちょっと休んでいいですか？」

「もちろん、どうぞ。で、何から歌うの？」

「何でもいいです」

こんな調子でスタートして、この日は、休憩も含めて4時間ほどで7曲を歌いました。

「次、何歌いましょうか？」

森川さんは調子がいいようですが、7曲も歌えば、流石に喉の調子に変化が出ます。声質として、滑らかさが欠けてきていました。

「声質が少し疲れて聞こえているから、今日は、ここまでにしましょう」

「そうですか？ わかりました」

前述したように「おんなになあれ」の歌は、押尾コータローさんのギターと同時録音を済ませていますので、残りは5曲です。これで、先が見えました。ここは喉を休めることが先決だと考え、スタジオ作業を終了しました。

翌日ゆっくり午後からスタジオをスタートしましたが、順調に歌入れは進み、夕方には終了しました。見事に歌い切って、近くのお好み焼きで食事をしてから、「ありがとうございました。お疲れ様でした。」と丁寧に挨拶をした後は、振り返ることなくスタスタとタクシーへ乗り込み、品川駅へと向かい大阪へ帰っていきました。

こんなに歌が好きで、歌うために生きている。2011年の夏のうどん屋さんで感じた、森川美穂という人物は、もしかしたら、デビュー前から、ずっとこうした姿勢で生きてきたのでしょうか。

森川美穂という歌手がどんな人物なのか、私もやっとわかってきたように思いました。

### BEST COLLECTION「Be Free」 Music Video

<https://youtu.be/O5diowe1eUc>

森川美穂 待望のベストコレクション！  
今だからこそ表現できる歌がここにある。



次回は、2018年10月リリースアルバム「female」についてレポートします。